

# 発電設備専門技術者 インタビュー②6

## はりき かずひさ 梁木 計尚さん（株式会社ニシテック）



これまでの施工経験を語る梁木さん

非常用発電設備、ポンプ設備等の設計施工を業務の柱とする株式会社ニシテック。同社の取締役東京支店長の職にあり、施工・営業の第一線で活躍されてきた梁木計尚さん（52歳）を取材した。内神田にある東京支店にお伺いした処、開口一番「あまり大したことはしてないんですけどねえ」と控えめに答える梁木さん。業界に入られて現在に至るまでの道程をお聞きした。

### 施工監督はコミュニケーションも大事

株式会社ニシテックは昭和51年に創業、西日本及び関東を主要エリアとする年商41億、従業員63名の徳島が本社の中堅企業である。梁木さん自身も徳島県鳴門市の出身。25才、平成2年に入社した。「地元企業ということでの入社。大学は文系、他業種からの転職でしたから、最初は不安だらけでした。」

梁木さんが入社した当時は従業員16名ほどの小所帯。メーカーでの研修、先輩社員からのOJTを受ける中で、徐々に施工管理の大事な要素を身に付けていく。

初現場は静岡県のリゾート施設の常用コージェネ発電設備（ディーゼル機関駆動。150kVA×1基）。試運転調整業務に従事した。約1ヶ月、梁木さんはメーカーの施工技術者に同行し、元請のサブコンや職人さんとの間を行き来しながら、機器の最終調整に奔走する。「宿泊客の就寝を想定して真夜中に騒

音測定したりね。やった作業は全てノートに書き写していました」と、擦り切れた当時のノートを見せてくれた。

加えて、建設現場では施工技術もさることながら人との調整も肝要であることを梁木さんは知る。「技術は勿論ですが、工程や原価管理といった擦り合わせを要する業務が多いんですよ。その為の交渉力も大切だということに気づきました。」

続けて梁木さんはこう話す。「現場で色々な方と話すのは元々嫌いじゃないですよ。自ずと営業感覚も養われていったのかな。」

そのため、部下に対しては常日頃から技術と共に「会話を磨け」と言っているという。



発電装置のクレーン搬入光景

### 消防署とのやりとりで成長させてもらった

入社3年目、28才。平成4年、神奈川の競輪場の非常用ガスタービン（750kVA×1基）新設工事。梁木さんにとって、燃料タンク別置型での初めての施工であった。タンク容量は5,000L。現在では決して大容量とはいえないが、消防法上、設置許可申請が必要な危険物施設である。梁木さんは所轄消防へ事前申請、完成前検査、完成検査の各対応を一人で行い、滞りなく務め上げた。「消防署と打ち合わせをして、指摘されたことを会社の資料や参考書で調べての繰り返し。貯蔵所とか一般取扱所に関してこの頃最も勉強していたかな。」

失敗もあった。東京の某総合病院における非常用

ガスタービン（1,500kVA×1基）及び4,500Lの屋内タンクの施工でのこと。消防完成検査当日、消防官にタンクと壁との保有距離不足を指摘される。タンク下部と壁とはOK、タンク上部と壁の距離がNG。壁面がゆがんでいた。「まさか壁面がゆがんでいるとは想像もしなかった。確認不足でした。」と当時を悔やむ。梁木さんらは、後日タンクを移動して保有距離を確保、晴れて消防署より検査済証をもらうことが出来た。

所轄消防との対応の心得をお聞きすると、次の答えが返ってきた。「予備知識をしっかり持って臨むこと。でも分からないことがあれば素直に聞いて、教を請うことが大事です。」

この頃に梁木さんは自家発電設備専門技術者資格を取得した。「内発協のテキストも資格を取る前からずっと持ち歩いて読んでいましたよ。」

発電設備専門技術者に加え、梁木さんは特種電気工事資格者、電気・管の1級施工管理技士も取得している。



消防官に説明する梁木さん

## 都心での大容量燃料タンクの施工

30代から40代にかけ、梁木さんは都心の大型物件に多く携わる。平成13年、37才、汐留の大手通信社本社ビルの新築工事。非常用ガスタービン（2,000kVA×1基）に繋がれた燃料は、100,000Lの大容量地下タンクと18,000Lの屋内タンク。BCP対応の先駆的物件であった。深夜、タンクは大型トレーラーにて搬入。鳶職の方の見事な手捌きもあり、与えられた時間内にピット内に無事運び入れることができた。発電設備も予定通り工期内に完了。「20代での色々な経験が活かされたね」と梁木さんは嬉しそうに語る。

年を同じくして、梁木さんは八重洲口の某ビルにて縦型円筒型の燃料タンクを初めて取り扱った。この時のタンク容量は25,000L×2基。設置面積の少ない縦置きは、ビルの限られた敷地の有効利用に大いに貢献した。

これまでの大容量タンクの施工経験を活かした集大成の物件が、平成22年に竣工した東京・丸の内

某ビル。非常用発電設備はガスタービン2,000kVA×1基、1,500kVA×3基の計4基。バックアップ電源の長時間化が施主の要望であり、地下空間の高度利用が課題となる。梁木さんは八重洲口のビルでの経験を活かし、当初の計画であった横型タンクを縦型に変更することを提案。23,300L×6基、17,900L×3基ものタンクを配置できるようにした。安全性についても消防や都の建築部局と構造計算などの協議を何度も重ね、無事竣工にこぎ着けた。「限られた地下空間の中で、タンクは勿論、発電設備の排気・吸換気ダクトの取り回しも大変な物件でしたね。」



縦置円筒型地下タンクの検査（東京消防庁HPより）

## 防災・危険物施設のスペシャリストを目指せ

東京オリンピックが開催される2020年まで、都内では大規模再開発が目白押しである。梁木支店長が管轄する東京支店においても非常用の1,000kW以上を中心に受注が詰まっているという。ニーズも先に述べた燃料タンクの大容量化に加え、発電設備の複数台化、デュアルフェューエル化が多い。「当社の実績はオフィスビルの非常用が圧倒的。1人で複数物件抱えている者も多いから、受注が多い今は正念場ですね。」

梁木支店長は現在、先頭に立って主にサブコン宛に設備更新の設計提案を行っている。

「我々の元請けは大手のサブコンさんばかり。電設技術では太刀打ち出来ませんから、防災用発電設備や燃料タンクなどの危険物施設のスペシャリストになるのが我々の生きる術かな。その基盤となるために若い社員には色々な経験をして欲しいですね。挑戦をし続けることです。」